



『秋色』

対馬を愛し

対馬を描き続けた画家

津江篤郎

遠くに輝く美を求めて、対馬の自然から教わりながら、もがき狂う旅人でなければならぬ。
そんな心で私の絵をみて貰えれば有難いことである。

津江篤郎画集より

つ の え とくろ う
津江 篤郎

大正4年、厳原町宮谷に生まれる。対馬中学校、京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）図案科卒業。昭和12年、福岡県大牟田市三井工業高校に勤務。昭和23年、対馬に帰郷。画塾を開き児童美術・商業美術の研究と活動にのめり込む。昭和28年、第38回「二科展」に初入選、以後第62回まで24回連続で入選。昭和53年、「現代美術家協会展（現展）」入選。長崎県展審査員、厳原町文化財保護審議会委員長。対馬高等学校・対馬教員養成所・保育所・幼稚園などで美術講師としても活躍。厳原町文化功労賞、長崎県教育委員会特別功労賞、長崎県民賞・フランス評論家大賞などを受賞。平成15年1月27日永眠。享年88歳。



第40回現展 『早春』

長崎県立美術博物館蔵



第45回現展 『島の春』

対馬市交流センター13Fに展示

先生を偲んで

対馬美術協会会長 御手洗 哲

津江先生との出会いは、私がまだ小学3年生の頃、先生が自宅で開いていた絵画教室に通い始めたのがきっかけでした。毎回、先生のお手本を模写するのですが、描き始める前は必ず「好きなように、思うままに描きなさい」描き終わると「おう、上手いぞ」と褒めてくれました。保育園などでも指導をされていましたが、どの子にも同じように愛情をそそぐ本当に温かい方でした。津江先生の指導を受けたという人はかなりの数に上るのではないのでしょうか。

昭和39年、現在の対馬美術協会の前身となる対馬洋画研究会を立ち上げ、会長として活躍。機関紙「道祖神」を発行し、対馬の芸術の発展に尽力されました。



先生の自宅には芸術を愛する人が集まっていました（中央：津江先生 手前：御手洗さん）



先生の作品の魅力は、独特の筆使いと色あい。そして「対馬」を描き続けることを貫いたことではないのでしょうか。作品からは「対馬を愛する気持ち」が溢れています。津江先生が好まれた色は「インディアンレッド」と呼ばれる赤茶色。形や見た目にとらわれず本質を思うがままに描く津江先生の世界観は、対馬で活躍する多くの芸術家に影響を与えています。まさに絵に生きた、対馬を代表する洋画家でした。

先生の作品の中で私が好きなのは「林・川」という作品です。色使い、構成が素晴らしく真似をさせてもらったものです。

対馬に洋画の灯をともした津江先生の思いを、後世に受け継いでいきたいと思っています。